

味を表す言葉

—「おいしい・うまい・まずい」の多義性と構文の特徴—

パリ・ディドロ大学 教員 中島晶子

1. はじめに

味を表す言葉はさまざまにある。本稿では、味の良し悪しの評価を表す基本語「おいしい」「うまい」「まずい」を取り上げ、その多義性を考察する。この問題を扱った研究は多いが、これまでの知見をふまえて、特に各語がそれぞれの意味に応じてどのような語と共起するか、どのような構文で使われることが多いか、頻度はどうか、といった点から考察する。

例文の検索に当たっては、筑波大学、国立国語研究所、Lago 言語研究所が構築したコーパス検索ツール『NINJAL-LWP for TWC』(<http://corpus.tsukuba.ac.jp>) を利用した。

2. 先行研究

まずこれらの語のうち「おいしい」と「うまい」は類義語であり、それぞれ「まずい」と反義関係にある（森田 1989）。「おいしい」と「うまい」の違いとして、まず、「おいしい」が男女ともに使う言葉であるのに対し、「まずい」が主に男性が使うという位相の差が挙げられる（高崎 2012 など）。そして、「おいしい」がもっぱら味について使われるのに対し、「うまい」「まずい」は味以外の意味でも使われ広い用法をもつことが挙げられる。武藤（2002）は「各語の複数の意味の相互関係は、比喻により動機付けられる」とし、各語の多義構造をまとめている。これについてはつづく節で随時取り上げていく。武藤（2002）のなかで考察対象となっている例文はほとんどが連体修飾用法のものだが、述語用法や連用修飾用法の例にも当たり、類義関係と反義関係にあるそれぞれの語がどのように対応しているか見ていく。

3. 「おいしい」の意味と用法

「おいしい」は「味がよいの意の女房言葉「いしい」に、接頭辞「お」の付いた語」（日本語大辞典）で、もともと女性言葉であったことから、現在も味のよさを言う場合に女性は類義語「うまい」より「おいしい」を使う傾向がはっきりしている。その一方で、くだけた場面で「うまい」を使う男性も、丁寧に言う場面では「おいしい」を使っており、「おいしい」の使用に現在では性差はあまり見られなくなっている（高崎 2012）。

武藤（2002）は「おいしい」を 4 つの意味に分類しているが、このうち、「期待感・好ましさのあまり顔をほころばせたさま」（Ex. おいしい顔）という意味をメトニミー用法として大きく括り②のなかにまとめ 3 分類にしてまとめたのが以下である（書き方を一部変更）。

- ①（基本義）飲食物の味が良い（と感じられ好ましく思う）さま

Ex. おいしいお菓子

- ②（①のメトニミーから）食欲をかき立てるような嗅覚的・視覚的属性あるいは①に直接関わる（話・文章の）内容。また、期待感・好ましさを表す表情。

Ex. おいしい匂い、おいしい色、おいしいレシピ、おいしい顔

- ③ (①のメタファーから) ある事物が格別の価値を持つことから深い満足感が得られ望ましいと感じるさま

Ex. おいしい生活、体においしい、おいしいボール、おいしいバイト、おいしい話
まず①の基本義では飲食物を対象に味の良さを表し、②はメトニミーによって対象が飲食物からそれと関連のあるものに転用され、飲食物の匂いや外観、または、おいしいものを食べた時に出る表情などを表す。原因(飲食物)で結果(副産物)を表すメトニミーと考えられる。一方、③はメタファーであり、味覚のよさに類する好ましいという性質を味覚以外の領域の事物に適用している。

これらがどのような構文で現れるかを見ると、それぞれで違いが見られる。

- (1) a. おいしい {料理／ご飯／お菓子／コーヒー}
b. {料理／ご飯／刺身／お酒} がおいしい。
(2) a. おいしい {色／匂い／レシピ／顔}
b. この {?色/?匂い/?レシピ/*顔} はおいしい。
c. ああ、この {色／匂い／レシピ／顔} はいかにもおいしそうだ。
(3) a. おいしい {話／思い／仕事／生活／情報}
b. この {話/*思い／仕事／生活／情報} はおいしい。

例(1)のように基本義①の場合は連体修飾部でも述部でもは制約はなく、NLTによる構文パターンのなかでも頻度が高い。これに対し、メトニミー用法②の例(2)の場合、述部では不自然になり、(2c)の「そうだ」のようにメトニミー解釈を助ける表現が必要となる。

メタファー用法③の例(3)では、慣用的表現となっている「おいしい思いをする」以外は述部に使っても非文とならない。ただしNLTを見ると(以下、カッコ内は出現数)、「は／がおいしい」パターン(15885)のうち、用法③で最も多いのが「報酬がおいしい」(6)で、述部で使うのは一般的ではないと言える。この用法③では「おいしい+名詞」パターン(36950)がより頻度が高く、名詞別に「話(328)、思い(138)、仕事(57)、生活(33)など」となっている。用法③の述語用法が非常に低頻度ではある一方で非文にならないということは、この比較的新しい用法が一定の広がりを見せ、今後述部でも使われることが多くなる可能性もあることを示していると考えられる。

用法③の例を見ると、「簡単な方法で利益を得る」ということの意味合いは、共起する名詞によって異なる傾向にある。例えば、慣用表現の「おいしい思い(をする)」は、労せず利益を得ている人を非難した言い方だが、非難の意味はいつもあるわけではない。

- (4) a. おいしい話には裏がある。儲け話にはご注意を！
(http://www.city.himeji.lg.jp/s30/2212110/_9895/_9985.html)
b. 失業してハローワークに行っても、アルバイト情報誌、就職サイトを探しても、おいしい仕事なんて一つも載ってないと思います。
(<http://www1.yel.m-net.ne.jp/mk-kobu/column.html>)
c. 温泉宿の特典や、おいしい情報が届きます。
(http://www.jiyujin.co.jp/onsen/request_jiyujin0909.html)
d. 「歯科助手は」朝は早いけど、休憩時間はちゃんとあるし、連休もしっかりとれるおいしいシゴトだと思う。

(http://www.froma.com/info/edit/oshigotoguide/301_112_186.html)
頻度が最も高かった「おいしい話」は328例のうち、(4a)のように「裏がある」「だます」

という表現と使われているものが 199 例あり、また、非難の意味合いはなくとも (4b) のように「おいしい話はあるわけがない」などのように否定文に使われている例が少なくない。これに対し、「おいしい情報」(52 例) は 34 例が「おいしいものについての情報」というメトニミー用法であったが、「役立つ情報」「楽しい情報」というニュアンスがあり、残りの 18 例は「(投資などで) 得をするための情報」で、そのほとんどが積極的に利用すべき情報といった文脈で使われている。また、「おいしい仕事」(57 例) は仕事のカテゴリーとして、だれにでもでき、よい収入のものについて言うのが一般的で、そういうものはないという文脈での使用も少なくないが、批判的な意味が表現自体にあるわけではない。

メタファーによって拡張した意味は、単に意味の領域が(味覚から事物へ) 変わるだけでなく、さらに特定のニュアンスを帯びることが多い。「おいしい」の場合は基本義の快い味覚という意味に、「大変な思いをしない」つまり「簡単に」という状況が付加され、それで望ましい結果が得られることから、「安易すぎる」「裏がある」という否定的な意味合い、あるいは、「お得」という肯定的な意味合いをもち、それがさらに共起する語によって個々の解釈に傾向の違いが出てくるのである。

最後に連用修飾用法については、森田(1989)は結果修飾として(5a)の例を挙げ、また、森田(2008)では内容修飾的な(「連用形+思う/感じる」など)意味合いがこめられるとして(5b)の例を挙げている。

(5) a. 豆をおいしく煮る。

b. 昼食は豪華な祭ずしを、おいしくいただいた。(岩田幸子『笛吹天女』)

「煮る、作る」のような産出を表す動詞の場合は結果修飾になり、「食べる、飲む」のような飲食行為を表す動詞の場合は内容修飾となるようである。NLT を見ると頻度の高い動詞は後者のほうである。

(6) a. 何でも美味しく食べる。家庭円満の秘訣のようです。

(http://www.wataclub.net/supplement/health/he_diet.html)

b. 幅広い生活習慣病の予防効果が期待できるコーヒー。できれば美味しく飲みたい。

(<http://www.mamekan.jp/qana/index.html>)

まず(6a)では内容修飾のように「おいしいと思って」という解釈のほか「よく味わって」という行為者の態度を表す動作修飾の解釈もできるだろう。(6b)も同様だが、「おいしく作って/して」という結果副詞の意味も含む行為の準備段階に焦点が置かれているように思われる。いずれにしても、次節で述べる「うまく」のように行為の巧みさを表すことはなく、味のよさという属性を飲食物に付与する点は変わらない。

以上のように、「おいしい」は意味拡張によって、属性を付与する対象が飲食物などの具体物から活動や知識などにも適用され、その属性も味覚のよさから、より一般的な満足感を与えるものという意味に広がった。ただ満足感といっても、幸福感のような観念的な満足感ではなく物質的な満足感に留まる点が、基本義の感覚的満足感との連続性を感じさせる。

4. 「うまい」の意味と用法

「おいしい」の類義語である「うまい」も味のよさを言うのが基本義であるが、「おいしい」との位相差がよく指摘される。高崎(2012)では「うまい」と「おいしい」について双方ともに「実際食べた感覚を直接的に表現する」とし、位相差については話し言葉のみならず書き言葉でも「うまい」はもっぱら男性が使うこと、そして「おいしい」はもともと

女性語であったが、「うまい」と位相を異にするこの語を男性が積極的に使うようになっていく点を指摘している。

それでは、「うまい」と「おいしい」は位相以外にどのような違いがあるのだろうか。まず、「おいしい」はもっぱら味覚について使われる語であり、それ以外の意味は比較的新しく、全体からすると頻度はまだそれほど高くない。これに対し、「うまい」は味だけでなく、より一般的なスキルの高さを表す用法が多く見られる。武藤（2002）では「うまい」の多義を以下のようにまとめている（書き方を一部変更）。

- ①（基本義）飲食物の味が良い（と感じられ好ましく思う）さま
Ex. うまいお菓子
- ②（①のシネクドキーから）技術（あるいはその結果としての出来映えの程度）が巧みで優れているさま
Ex. うまい運転、うまい字
- ③（②のメタファーから）思考・態度が優れており適切であるさま
Ex. うまい言葉、うまい考え
- ④（①のメタファーから）事態の進展（あるいはその結果）が思いのほか好都合で望ましいさま
Ex. うまい話、うまい汁（を吸う）

基本義①の飲食物の味のよさという意味がシネクドキー（下位概念から上位概念（あるいはその逆）への転用）によって、さまざまな分野における「技巧の高さ」を表し②の意味となり、これがさらにメタファーによって「その場に相応しい手際の良さといったような適切さ」（武藤 2002）を表す意味に転用され③になる。この「適切さ」は状況や目的をかんがみて対象となるものの巧みさを表すものであり、「おいしい」にはないタイプの意味拡張である。また、基本義①の表す性質がメタファーによって味覚以外の領域の事態に転用され、「おいしい」の用法③に近い意味となる。

位相の点では、①以外の意味では女性も使うが、ややぞんざいな言い方に近くなるため、より丁寧に言うときは、②は「上手な（運転）」、③は「いい（言葉、考え）」、④は「いい（話）」（「うまい汁を吸う」は慣用表現）などになるだろう。

基本義①は「おいしい」と同じ記述になっているが、どのような違いがあるだろうか。飛田良文・浅田秀子（1989:83）では、「本来飲食物と考えられていないものの味については、ふつう「うまい」は用いない」とし、不適当な例として「この水薬はなかなかうまい」を挙げ、数少ない例外として「山の新鮮な空気がうまい」という例を挙げている。この制約は「おいしい」ではゆるいようで、一般的ではないにせよ、次のような例もある。

- (7) 美味しい薬も中にはありますが、そんな薬を〔子どもに〕飲ませるときでも、決して、美味しいから飲みなさいとはあまり言わないでください。

(<http://www.ikomaiin.com/hukuyakushidou.html>)

また、森田(1989)では、「「うまい」が舌先の美味感覚だけでなく、味わい深さ、こくのある滋味をも含めるのに対し、「おいしい」は味覚の良さをさす」と説明している。

構文を見ると、意味によって制約が見られる。

- (8) a. うまい {酒／魚／料理／水}
b. {酒／魚／料理／水} がうまい。
- (9) a. うまい {文章／絵}
b. {歌／絵／英語／連携} がうまい。

(10) a. うまい {方法／言葉／使い方／説明} (を考える)

b. ?この {方法／言葉／使い方／説明} はうまい。

(11) a. うまい {具合 (に行く)／話／汁 (を吸う)}

b. この {*具合/*話/*汁} はうまい。

基本義①は連体修飾部でも述部でも制約はなく、NLT による構文パターンを見ても頻度が高い。シネクドキー用法②も制約はないが、実際の使用を見ると、連体修飾では共起する名詞の数が限られているのに対し、述語表現ではより多くの語と使われており、頻度にも偏りが見られる。「うまい＋名詞」パターンで頻度が最も高かったのは(9a)の「文章 (52)、絵 (50)」で、「…が／はうまい」パターンでは(8b)の「歌 (376)、絵 (281)、英語 (184)、連携 (182)」であった。これがメタファー用法③になると、連体修飾が普通で、述部に使うと不自然になる。共起する名詞はものごとを進めたり考えを伝えたりする方法（言葉も含む）を表す語に限定されている。

メタファー用法④は述部では使えず、連体修飾のみとなる。「話がうまい」と言えば「話術が巧みだ」という意味になり、「汁がうまい」と言えば「おいしい」という意味にしかない。共起する名詞は③よりさらに限られる。「うまい具合に行く」や「うまい汁を吸う」は慣用表現であり、これ以外で頻度が高い名詞は「話」かそれに類する語で、「おいしい」のメタファー用法③と比べると非常に限定されている。また、用例のほとんどが否定的な意味で使われ、「裏がある」「用心」といった表現が出てくるか、「そんなものはないから騙されないように」という文脈で使われている。「おいしい話」では、「そんなものはない」という場合も、「現実 is 厳しい」といった含みで使われていたのに対し、「うまい話」では次の例のように、「実害を受ける恐れがある」という警告的な含みをもった文脈での使用がよく見られる。

(12) 仕事を始める時は十分検討し「うまい話」に安易にのらないよう、少なくとも下記のことに注意して冷静に判断しましょう。(http://saitama-roudoukyoku.jsite.

mhlw.go.jp/hourei_seido_tetsuzuki/chingin_kanairoudou/kanai4.html)

次に連用形「うまく」を見ると、味のよさを言う意味はなくなり、巧みさを表すシネクドキー用法②の意味のみが適用される。「うまく」の類義語は「おいしく」ではなく「上手に」となる。森田 (1989) は「おいしく」と「うまく」の違いを(13a)の例で表し、「うまく」と「上手に」の違いについて(13b)のように説明している(同：195)。

(13) a. 豆を {おいしく／うまく} 煮る。

b. 「うまい／まずい」はその出来ばえに接しての精神的満足感や詠嘆の気分の色が濃く、「じょうず／へた」は技巧面での優劣に対する判断の色合いが強い。したがって「うまい／まずい」は結果から受ける主観的印象となり、「じょうず／へた」は意識的な行為に対する技巧の巧拙を考える客観的判断となりやすい。

次の表現にも両者のニュアンスの違いが感じられる。

(14) a. {うまく／上手に} 言ってね。

b. {うまく／上手に} 説得してくれよ。

「上手に」の場合、「相手の気を悪くしないような話し方で」といった行為の様態を表しているのに対し、「うまく」の場合はその行為をすることによって「(こちらが望む) よい結果を得る」といった目的あるいは結果を重視する含みがある。(14a)の動詞「言う」はそれ自体で目的を含意するものではないが、「うまく」を使うとこの結果に焦点が置かれる。一方、(14b)の「説得する」は相手に承諾させるという結果まで意味に含み、「うまく」の意

味は変わらないが、「上手に」では結果よりもその過程において「相手の気を悪くしない」やり方に焦点がおかれている。同じ様態副詞としても「うまく」が行為の結果に焦点をおく点が特徴的であると言えるだろう。

以上のように、「うまい」は意味拡張によって、属性を付与する対象が飲食物などの具体物から活動や知識などにも適用され、味覚のよさから巧みさ、さらに否定的な意味合いにもつながる都合のよさという意味をもつようになり、基本義以外は位相差がないことから、拡張した意味での使用の方が多くなっている。「おいしい」と比較すると、意味によって使われる構文に制約があり、メタファー用法④では共起する語も限られている。

5. 「まずい」の意味と用法

「まずい」の多義構造はかなり「うまい」と対応しており、武藤（2002）では以下のようになっている（書き方を一部変更）。

- ①（基本義）飲食物の味が悪い（と感じられ不快に思う）さま
Ex. まずいお菓子
- ②（①のシネクドキーから）技術（あるいはその結果としての出来映えの程度）が低くて劣っているさま
Ex. まずい運転、まずい字
- ③（②のメタファーから）見映えが悪いさま
Ex. まずい顔
- ④（①のメタファーから）事態の進展（あるいはその結果）が思いのほか不都合で望ましくないさま
Ex. まずい思い（をする）、まずい結果

味の悪さを表す基本義①がシネクドキーによって他のさまざまな分野における程度の低さを表し②の意味となり、これがさらにメタファーによって③の意味となる。④は①からのメタファーで、「うまい」の④の意味に対応すると言えるだろう。

「まずい」は「うまい」に見られる位相差はないが、味が悪いことを端的に言う表現のためか、「微妙」「いまいち」「残念」などの緩和的な表現の方が多く使われると思われる。そもそも悪い味のものを口にすること自体、日常的にそう頻繁にあることではないからかもしれない。いずれにしても「まずい」は味の意味よりも、そこから拡張した他の意味で使われることが多い。

NLT を見ると、事態やそのやり方を表す語句や節と共起する例が多く、④の意味での使用頻度が高いことがわかる。多かった名詞を挙げると（カッコ内は頻度数）、「まずい＋名詞」パターン（2062）では「こと（447）、もの（266）、状況（68）、ところ（64）、料理（44）」の順に多い。「…はまずい」パターン（2015）では「（節）の（562）、これ（377）、それ（136））、こと（63）」で、基本義①でもっとも多かったのは「食事（17）、料理（16）」である。「…がまずい」パターン（1468）では、「（節）の（129）、（動詞連用形）方（61）、やり方（52）、水（47）」となっている。

構文を見ると、すべて基本義①は連体修飾でも述語用法でも使われるが、連体修飾のほうが多い。NLT では、「まずい＋名詞」パターンで 620 例、「…は／がまずい」パターンで 470 例である。②～④でも両方の構文で使われるが、以下で見るように述部が多い。

②で高頻度の語は「やり方」と「対応」で、これを構文別に頻度を見ると、連体修飾がそれぞれ 11 例と 10 例、述部（…が／はまずい）が 60 例と 42 例で、他の語も同じ傾向に

あり、連体修飾も使われるが、述部でより頻度が高い。共起する名詞は、技術を要する活動やその産出物を表すもの（運転、字、文章）よりも、特定の状況での立ち回り方（やり方、対応、説明、発言）という社会的なスキルを表すものが実際は多いようである。この場合、対象が飲食物から活動や行為に転用されているだけでなく、運転のように状況に関わりなく対象に付与しうる技術に限らず、状況によって判断される行為の適合性を評価する表現となっている。そのため、本来はよしとされることが状況によって「まずい」と言われることがある。

(15) つまり、正しさを全面に出すのは戦略的にまずいやり方だ。(http://home-yasupapa.pya.jp/igaku%20o%20kangaeru%20no%20kegasousyouchiryō-3.html)
対象の属性そのものを言っているのではないという点で、この用法はむしろ④に含めるべきかと思われるが、技術の低劣さを指す②の意味も持ち合わせており、②と④にまたがる用法として見ることができるだろう。

次に③の場合を見ると、よく例として挙げられる「まずい顔」は人を侮蔑する時や極端な言い方で人を笑わせる時、または「まずい顔でも」のように仮定表現として使うくらいで、実際の用例にはあまり出てこない。NLT では「まずい顔」が 2 例、「顔がまずい」が 4 例見られたのみであった。「スタイル」など他の語も数例に留まっている。

意味を見ると、連体修飾では(16a)のようにもっぱら見映えの悪さを意味するが、述語用法では②のように、状況から見て適合性を判断する④に近い解釈も可能となる。

- (16) a. まずい顔に白粉をぬりたくった娘達（豊島与志雄『不肖の兄』青空文庫）
b. 白粉をぬりたくった娘達は顔がまずい。
c. 白粉をぬりたくった娘たちの顔はまずい。

(16a)を述語表現に言い変えと、(16b)では見映えの悪さを表すのに対し、(16c)では見映えの悪さと不適切さの両方の解釈が可能である。後者の場合は、「よそではいいが、ここでは困る」といったことが含意される。

次に④の意味を②と③と比べてみると、②の技術の低劣さ（または不適合性）や③の見映えの悪さ（または不適合性）を原因とし、その結果として④の状態、つまり、事態の進展や結果が望ましくない、不都合であるということになるという連想から、④を②と③のシネクドキーとして捉えることもできるだろう。②と③が対象にそなわる属性そのものを表すのではなく、状況に即しての不適合性を言う場合に、その不適合性の結果として、④にある「望ましくない、不都合である」という意味をもつわけである。

構文を見ると、さまざまな語と共起するが、頻度が突出して高いものはいくつかある。「まずい+名詞」パターンでは「こと」(419)、次に「状況」(68)で、「まずいことになった」という言い回しが慣用的に多く使われている。「…がまずい」パターンでは「(節)の」(129)、次に「これ」(34)、「…はまずい」パターンでは「(節)の」(552)、次に「これ」(377)そして「それ」(131)である。

- (17) a. まずいことになった。ふくらはぎの辺りがつって、激しく痛む。

(http://ameblo.jp/eliesbook/theme-10015527807.html)

- b. 何も確認せず来たのがまずかった。(http://nice.kaze.com/t-com07.html)
c. 上司に相談したのはまずかったかも。

(http://oshiete.goo.ne.jp/qa/3132307.html)

いずれも、事態の展開が望ましくない方向に行っている状況や望ましくない結果となったことを認識して述べた表現である。

一方、主体が失敗や失態を認めた時によく言う表現として、「まずった」という語形が述部または一語文で間投詞的に使われることがある。話し言葉であり、動詞の過去形をとっているが、これに対応する動詞「まずる」はない。

- (18) カードの裏には有効期限が 1 年としっかり記載されている。まずった。泣きたい。
おカネをどぶに捨てたようなもんだ。

(<http://yondance.blog25.fc2.com/blog-category-19.html>)

存在しない動詞の過去形「まずった」が作られた背景には、「まずかった」という過去の状態ではなく、失態をしたという行為に焦点を当て表現しようとする意図があると思われる。おそらく、似た意味をもつ「しまった」「失敗した」などからの類推で語幹「まず」に「った」が加わったのではないだろうか。この「しまった」の意味も、動詞「しまう」ではなく、補助動詞「てしまう」から来ている。「しまった」に代表される構文「一語動詞文（＋た）」から、もとに戻せない失敗行為を主観的に表すことに動機付けられて「一語形容詞文（＋った）」という形の「まずった」が生まれたと考えることもできるかもしれない。しかし、同じ語形の形容詞は他になく、生産的なものではない。

最後に連用形「まずく」を見ると、使用頻度が非常に少なく、主語の属性を形容詞の連用形で表す「～なる／感じる／する」以外では、「作れる」が 3 例、「食べる」が 2 例である。森田(1989)は意図的である場合のみ可能としている。

- (19) 塩分を控えてうどんを不味く食べるより、スープを残してうどんを美味しく食べた
いってところですね。

(<http://blog.livedoor.jp/chiblits/archives/50883261.html>)

この文の「不味く」は「まずいと思いながら」あるいは「(わざわざ) まずく作って／して」の両方の解釈が可能である。「まずく」は技術の低さではなく味の悪さを表し、「うまく」ではなく「おいしく」と反義関係になっている。しかし、おそらく意味の面から使う場面が少ないため、「おいしく」と比べ、使用頻度は非常に低い。

以上のように、「まずい」は意味拡張によって、属性を付与する対象が飲食物などの具体物から他の事物に適用され、味の悪さから技術的な低劣さ、さらに事態の進展や結果が望ましくない状態にあることを表すようになっていく。「うまい」と同様に基本義からの転用であるメタファー用法での使用が多い。基本義①とメタファー用法④では「おいしい、うまい」と反義であり、シネクドキー用法②では「うまい」と対をなし、連用修飾では「おいしく」の反義になる。

6. おわりに

「おいしい」「うまい」「まずい」の多義構造とその使用状況を共起する名詞や構文の特徴などから概観した。類義関係または反義関係にある表現が同じような類推によって意味拡張している場合にも、それぞれの意味の違いが構文の制約や共起する名詞の傾向などに反映している点を考察した。今後、用例をより体系的に整理した上で分析を進めていく必要がある。

参考文献

瀬戸賢一ほか（2005）『味ことばの世界』海鳴社

高崎みどり（2012）「“美味”を意味する語の使用と性差：「おいしい」を中心に」『人文科学
学研究』8, pp. 55-68

飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞用法辞典』東京堂出版

武藤彩加（2002）「「おいしい」の新しい意味と用法—「うまい」「まずい」と比較して—」
『日本語教育』112, pp. 25-34

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

森田良行（2008）『動詞・形容詞・副詞の事典』東京堂出版